

---

**テストには出ないけど覚えよう。異世界ってね、危ないよ！**

置田S

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

テストには出ないけど覚えよう。異世界ってね、危ないよ！

### 【Nコード】

N7291S

### 【作者名】

置田S

### 【あらすじ】

テストを明日に控えた時子を召喚したのは、享楽主義の王太子。最初は警戒していたものの、喉元を過ぎた熱さは早々に忘れてしまう性質の時子は、王太子の手のひらでコロコロ転がされる羽目に。「楽しければ楽しいほど良い」「私は平和が一番だっと思うようになりますよ、お陰様で」色恋沙汰に巻き込まれ、政争にも巻き込まれ……滞在期間は一週間と短いけれど、密度が濃過ぎやしませんか！？ 俗物を地でいく主人公の、グツタリな異世界生活についてのお話。

空になったペットボトルをソファの上に投げ捨て、新しいものへ手を伸ばす。

部屋に持ってきて3時間が経つペットボトルはどれも汗を掻き、温くなってしまっていた。

休憩がてらに氷を持ってこようかと考え、時子は頭を振った。休憩をする余裕が自分にあるか？ 答えは否だ。

生ぬるいお茶でカフェインを摂取し、足下まで忍び寄ってきている睡魔を追い払う。

『決戦兵器』と表紙に書かれたノートの内容は半分も頭に入っていない。ここで眠ること、即ち敗北を意味していた。

ノートをノリノリで作っていた時には、まだ、余裕があった。

何故あの時、もっと必死になって勉強をしなかったのかと悔やむが、後の祭りだ。決戦 テストまで、あと8時間を切っている。登校時間を考えれば、残された時間はさらに少ない。

メキ、と音を立てたのは、握り締めたシャープペンシルか、それとも時子の心か。

(ここで負けられるか……！)

携帯の待ち受け画面に映された現在時刻と日付を睨み、時子はノートへ視線を戻した。

8時間後にはテスト。そして5日後には、時子お気に入りのブランドが「最高傑作」と銘打つゲームが発売する。

ゲームのためにも、時子はテストという敵に打ち勝たねばならなかった。

……その前に、欲深い自分に勝つべきだったのでは？ と心の隅から白い時子が訴える。これに対し、黒い時子がすかさず「お前も最終的には同意したじゃねーか！」と逆ギレた。

泥仕合に終わりはない。志賀時子が目先の欲に囚われやすい人間で、喉元を過ぎると熱さを忘れてしまう人間であることはとつくの昔に分かつていた。三つ子の魂なんとやら、自他共に認める時子の性格だった。

ゲームの発売日は4ヶ月前に分かつていた。計画的に貯金出来ていれば、こんな、死ぬ気で勉強する羽目にはならなかった。

なぜ、「ちよつと時間があるから」「ちよつとお金に余裕があるから」とポツと出のブランドが作ったゲームに飛びついた、時子。パケ買いして大ハズレだ、時子！

後で困ると言うことを理解する頭はあるのだが、本当に困るんだと念を押してくれる良心が時子にはなかった。

ゲームを筆頭に、色々な無駄遣いをした時子は、本命のゲームを発売日に買うことが出来ない状態になってしまった。

しかし家族とは有り難いもので、慈母のような笑みを浮かべた母が、時子に、救いのような手を差し伸べてくれた。

「次のテストで順位を20番上げられたら、お母さんがそのゲームを買ってあげるわ」

「ゲフッ」

慈母の「ような」笑みで、救いの「ような」手だ。

強烈な一撃を叩き込まれた時子は思わずむせた。

「いや、お母さん、それはちょっと、流石に」

日頃ゲームばかりしている時子だが、決して、学業を疎かにしているわけではない。むしろ、他のオタ……いや、ふじょ……いやいや、なんちゃってゲーマーがそうであるように、割と真面目に学業へ取り組みでいる。テストだって真面目に受ける。必死では、ないけれども。

「無理じゃないわよ、時子ちゃん。5番の子に20番上を目指せて言ったら、そりゃあ無理よ。でも時子ちゃんは違うでしょ？」

時子は粘った。せめて10番！ 11番！ 12番！ と値切ってみた。

「駄目。お母さんね、時子ちゃんが死ぬ気で頑張るところが見てみたいの」

文章に起こしたら、語尾にはハートが付いていただろう。笑顔の母に、時子は勝てなかった。

かくして時子は、かつてない、過酷なテスト期間を迎えることになった。

ここで最初から自分を追い込むことが出来ていれば良かったが、日頃ゲームばかりしている時子は、母に課せられたミッションにちよっとワクワクしてしまった。リアルはゲームじゃないぞバカヤロウ！ とか後で思っても遅い。育成ゲームよろしく、無駄に綿密な

計画を立てるのに使った時間は決して返って来ない。

余裕のあったかつての時子が立てた計画はこうだ。  
得意科目は敢えて犠牲にし、のびしろの多い苦手科目を重点的に勉強する。

理屈では間違っていないが、余裕のあった時子は、自身の心情を考慮することをしなかった。

苦手な勉強ばかり続けた結果、学力以上にストレスゲージがうなぎ登り。

過去を後悔しまくる時子の出来上がりだ。

残すところ、一教科 犠牲にされた得意科目（勉強に充てる時間は一晚）の世界史のみであるにも関わらず、勉強に集中しきれない。

「今が楽しければ」という気持が常にあり、目先の欲を優先しがちな時子は、追い詰められても実力を発揮出来たりしないのだ。

ああすれば良かった、こうすれば良かった。いやいや、他にも道があった筈。ていうかそもそも……。

と、思考がウロウロ歩き出す。

年号、事件、偉人の名前。覚えなければいけない内容が、後悔に圧されて右から左へ抜けていく。

「寝てえ……」

諦めと睡魔が仲良く手を繋いで襲いかかり、時子は机に突っ伏した。

肉の切れる音、というのを知っているだろうか。

台所に立つ主婦に尋ねれば、ある女性は「ストーン？」と首を傾げながら答え、ある女性は「スッパリ？」とやはり首を傾げて答え、別の女性は「ぐにやり？」と答えたりするだろう。因みに最後の女性性は包丁を研ぎに出した方が良い。

市販の包丁で生肉を切っても、肉が潰れながら断たれる感触が包丁越しに伝わるだけで、音らしい音はしない。せいぜい、包丁がまな板を叩いた「トン」という音がするくらい。

「娘、娘」  
「ん」

これが、張りのある肉であり、切れ味の良い刃物であった場合は違ふ。

「娘、起きろ」  
「んんん」

刃が入った瞬間、張っていた肌は切断面とは逆方向に引かれ、切

り口ではプチンと音がする。

「おかあさん、あと5分……」

「起きねば、死ぬぞ」

実際に体験した時子が言うのだから、間違いない。

「起きぬなあ」

耳元に落とされる低い声に、ゆっくりゆっくり意識が浮上。  
首筋を撫でられ、目を覚ますまであと少し。  
むにゃむにゃむにゃと悪足掻き。

……を、したところだった。プチン、という音がしたのは。

自分の、

首から。

「痛アアアアア!？」

まどろみを痛みが切り裂き、時子はカッと目を見開いた。



\*\*\*

一言で言えば、混乱。

首が熱く、いつの間にそうしたか、自身の手の平が首を押さえつけている。

何がどうした、首がどうした。

訳が分からないなりに、何が起きたか確かめようと、首を押さえていた手を外す。

そして目に入っ たのは真っ赤に染まった手の平。

「血つて、なん」

何でって、それは勿論、傷があるからだ。

圧迫していた手の平が外れたことで、傷が痛みを訴え、その存在を時子に知らしめた。

「ちょ、まっ」

首から流れた血が鎖骨を伝い、胸の間を流れていく。  
生暖かい液体が肌を流れる感触に、時子の肌が粟立った。

何がどうしてこうなった。誰のせいでこうなった！

混乱の極みに上り詰めた時子は、絆創膏を探して手を彷徨わせる。実際には絆創膏でどうにかなる傷ではないし、時子は絆創膏を身近に置くような性格じゃないから、その辺を探しても絆創膏は決して見つからない。

あったのは、眠り込む直前まで使っていたノートと教科書、それからシャープペンシル、消しゴム、携帯電話だ。血塗れの手で触ってしまい、これらも血塗れ。

「いやいやいやいや、ノート作り直す時間とかないから!」

栄えある決戦兵器、暗記用のノートの無惨なこと!

「世界史どうすんの!? ちょ、おい、責任者出せえええええ!」

頭を振り、絶叫。

……した、ところで、

「くっ」

と、時子以外の人間が喉で笑う。

「くくくくく。ふはっ、ははははははは!」

時子の耳に、心底愉快げな笑い声が響く。

すると、一気に時子の視界が広がった。

突然の痛みで驚愕し、混乱に陥った時子の視野は極端に狭くなっていたのだ。

第三者の声が聞こえて、時子は漸く、自分の外側に意識を向けた。

「あはははは、は！」

腹を抱えて笑っているのは、恐ろしく顔の整った男だった。

影が出来るほど長い睫毛の下で、青い瞳が涙に潤む。髪は銀色。染めて作った銀色ではあり得ない、輪郭を滲ませるような輝きを放つ本物の銀だ。薄い唇は大きく開き、爆笑としか言えない笑い声を放っている。

笑いすぎだろ、と時子は心の中で呟いた。

声には出せない。男の後ろに、冗談かと思える格好をした男達が立っており、時子を睨み付けていたからだ。

ある者は鎧を纏い、ある者はゆったりとしたローブを身に着けている。ある者などは大きな宝石がついた杖をついていた。ファンタジー小説に出てきそう。そして、現代日本ではイベントでもなければまず見られない服装だ。

……では、時子はイベントに突然担ぎ出されたのか？ それでもって、首の皮をサクッと切られたと？ あり得ない。

夢である、という可能性も一瞬頭を過ぎったが、首から脳へ走る

痛み、脳が上げる「痛え！」という叫びが、夢である可能性を否定した。

つまりこれはどういうことか。

時子の脳内で、ゲームにありそうな展開が可能性の一つとして挙げられ、大多数がこの意見に頷いた。

最も現実離れた可能性ではあったけれども、目に映る光景は「それっぽい」。

鎧の男、ローブの男、杖の男、メイド服の女を順繰りに見やり、時子は目の前の男へ視線を戻した。他の人間と違い、寛いだ格好をしている。周囲の緊張なんて無いも同然に馬鹿笑いをしているこの男が、

「私だ」

目尻に浮かんだ涙を拭い、男は言う。

「責任者は、この私。目の前に責任者がいるぞ、娘。さて、どうする？」

「責任を取って下さい」

ほぼ反射的に時子は言った。

これに対し、男と時子を囲む者達からの視線はいつそう険しくなる。

しかし男は楽しげで、「良いだろう」と鷹揚に頷いた。

良いのか。

あまりにアッサリとした答えに、時子は少し悩んだ。

どうして私が？ とか、知ったことではない、と開き直られても困るが、物事はとんとん拍子に進み過ぎると不安になる。

時子には2つの選択肢があつた。

強気な態度で臨むか、下手に出るか。

男の機嫌を損ねるのは不味い、というのは何となく分かった。後ろに控えた皆々様が、時子の動向へ神経を尖らせている。声を出す者はいないけれど、彼等の視線は時子を排除したいと雄弁に語っている。

彼等が口と手を出してこないのは、男が上機嫌に時子の相手をしているからだ。

（ああ、もう、なるようになれ！）

模範解答を求めて記憶を探るけれど、最適な答えなどあるわけが

ない。

結局はいつもそうであるように、目先のことを優先させた。

「家に帰して欲しいんです」

「勿論、帰すとも」

「え」

思わず頓狂な声が喉から漏れる。

すると男を除いた者達の視線がさらに鋭く尖り、時子は内心「ギヤア！」と叫んだ。

「他には？ 娘」

「え、ええ」

肝心の男は全く気にした様子がなく、次を促す。

（良いの？ 本当に良いの？）

直球勝負は間違いだったのでは、という危惧が心に生まれるが、もう、一つ間違っても二つ間違っても同じの気がして……悩むのが少しばかり面倒になってきたこともあり、時子は開き直った。

「帰るまでの衣食住を保証してください」

「当然だな。それから？」

「ええと、傷の手当ても」

「それから？」

「ええと、ええと、話し相手が一人欲しいです。出来れば」  
「それから？」

「……いや、もう、そのくらいで」

周囲の視線は時子の喉に突き刺さる寸前だ。  
体を小さく縮こませ、時子は首を緩く振った。

「くっ」

すると男は、耐えきれないとばかりに体を折り、再び声を上げて  
笑い出した。

「あははははは！ 無欲、無害だな、娘。あれらの警戒が滑稽で仕方ない」

「お待ち下さい、これまでの例をお忘れですか！」

「忘れたな。いい加減にせよ、エイスレイド。娘一人にお前達が神経を尖らせる姿、愉快すぎて笑い死にしそうだ」

時子を睨み付けるだけだった男達の中で、最も年若い、鎧の男が  
「しかし！」と言い続ける。

けれども、ただ一人上機嫌の男はこれを見殺した。

「娘、名前は？」

時子と思う。この男、もしかや性格があまり……。

「娘」

「……時子です」

「そうか。トキコ、おいで」

男の後ろで声にならない悲鳴が上がる。

そもそも、時子と彼の場所はそう離れていないのだ。  
あまりに広くて気付かなかったが、時子がいるのはベッドの上。  
彼がいるのも、同じベッドの上。彼が寛いでいる場所のすぐ隣には  
点々と赤い染み 血の痕があり、元々時子は、彼の隣で寝こけて  
いたことが分かる。

時子の首の皮をプチンと切ったのが、彼であることも分かる。

声にならない悲鳴をあげた皆々様と同様に、時子もあまり、彼の  
側には行きたくない。

「…………お、お邪魔します…………」

でも拒否できる立場じゃなかった。

警戒しながら近付くと、男が時子の方へ手を伸ばす。  
思わず竦めた時子の首へ、彼の手はびっくりするくらい優しく触  
れた。

「どうかお待ちをつ！ 癒しの魔法であれば、このサウザンドが与  
えます」

「お前がするより私がした方が早かるう」

男の触れた場所がほんのりと温かくなり、痛みが瞬く間に薄れて  
いく。

…………聞き間違いでなければ、彼等は「魔法」と言わなかっただろ  
うか。

いや、考えてみれば当たり前だ。世界を跨ぐという奇々怪々な体  
験をしてしまった以上、誰か、何かの、常識外の力が働いている。  
そして男は、自分が責任者だと言ったのだ。



「どうした、トキ」

視線に気付いて、男が尋ねる。

魔法使いを目の当たりにした驚きで、時子は男を凝視してしまっていた。

「貴方は、その、魔法使いの偉い人なんですか」

「いや」

時子の首へ触れているのは別の手が持ち上がり、薄い唇を覆う。肩は小刻みに揺れた。どうやら、笑いを堪えているらしい。

彼の後ろに控えた人間達もブルブルと震えているが、あちらはまず間違いなく、怒りを堪えてのことだろう。

「名乗っていないかったな。私はルシード・ヴィティクス。魔法を使い、立場ある人間ではあるが、お前の言う「魔法使いの偉い人」ではない」

ではどんな立場なのか、と今後のために尋ねたかったが、ルシード以外の人間達が限界だ。時子の発言はルシードの笑いのツボを刺激すると同時に、彼等の逆鱗をヤスリでゴシゴシ擦っている。

ルシードは家に帰すと言ってくれたが、話が順調に進みすぎて、やっぱり、時子の中には不安があった。

というか、いないだろう。ここで手放しに喜べる人間は。

例えば男が本気で時子を帰してくれるつもりだとしても、気を抜きすぎてはいけない、と時子は自分に言い聞かせた。時子は、自分が喉元を過ぎれば熱さを忘れてしまう人間だと……危機感と緊張感を持ち続けるのが不得意な人間だという自覚があった。

（この人が心変わりをするといけないから、大人しくしていないと）

そして、帰るまでにどれくらいかかるかは分からない以上、周囲の人間との関係が早々に決裂する事態は避けたかった。……もう大分、手遅れの気もしないではなかったが。

「これで良い」

痛みがすっかり無くなると、ルシードの手が首から離れた。恐る恐る傷のあった場所へ触れてみれば、確かに、傷が消えている。

「まずは1つ。あとは話し相手と……それより先に、衣食住の保障をせねばな」

言って、ルシードの視線が時子の胸元へ落ちる。

つられるように自身の胸へ視線を落とすと、血でベツタリ濡れたジャージが目に入った。

淡い色合いのジャージであったことが禍いして、何とも分かり易いスプラッタ！

「……」

ルシードは自身が身に着けていたシャツを脱ぐと、絶句する時子の体に着せかけた。

「キド」

「はい、ルシード様」

ルシードが名前を呼ぶと、目くじらを立てていた者達の後ろから、スツと一人、白髪の男性が現れる。

時子は今の今まで、彼が部屋にいたことに気付かなかった。  
少し驚いてキドを見ると、キドは他の者と違い、穏やかな視線を  
時子に返す。

「私が面倒を見ると決めた娘だ。不足なく手配せよ」  
「畏まりました、ルシード様」

……キドへ視線を向けていた時子は気付かない。  
この時ルシードが浮かべていた笑みが、悪戯をたくらむ子供のそ  
れに酷似していたことに。

入浴させて貰えるのはありがたいが、手伝いのメイドは頂けない。着替えを用意してくれたのもありがたいが、コルセットは勘弁して欲しい。

メイド達が手に手に持ってきた煌びやかなドレスに、時子の顔は引きつった。

「未婚の女性は、スカートを履いてはいけないことになっているんです」

と、その場しのぎの嘘をつき、強情に言い張り、時子は男物の衣装を用意して貰った。

先程の部屋にいた鎧の男やローブの男が頭を過ぎり、どんなファンタジックな服が出てくるか恐々としたが、出てきたのは学生服と燕尾服を足したような服だった。ドレスよりはずっと親近感が持てる。

（もうちよつと地味でも良いんだけどな）

襟元を飾るスカーフの、繊細過ぎるレースを指で摘む。

いくらする代物だろう、なんて考えてはいけない。汚したら、なんて心配も今はやめるべきだ。

もしも汚してしまったら……それはその時に考えれば良いことだ。

「これはこれは、愛らしい装いですな」

身支度という名の攻防戦を終え、グツタリとした時子を迎えたのは、キドと、仏頂面をした黒髪の男だった。

飾り気は大分少ないが、彼等も時子と似たような姿をしている。

「お似合いですよ、トキコ様。あとはこちらをお持ち下さいませ」

そう言つてキドに手渡されたのは、黒い革で出来た鞆だった。

促されて中を開けると、時子の見知ったものが入っている。

「異世界からトキコ様と一緒に飛ばされてきたものを集めておきました」

血を拭われた教科書、ノート、それから携帯電話。時子が見落としていたものも幾らかあったようで、赤ペンや替えの芯なども入っている。確かめてみるに、机の上にあったものが殆ど時子について来たようだ。

「ありがとうございます、キドさん」

礼を言う。名前を言うのは少しばかり緊張が要った。

ルシード、キド……それから確か、サウザンドとエイスレイド。

最後に全てドがついたことは覚えているのだが、聞き慣れない音の羅列をきちんと覚えられたか自信がない。

（あ、そうだ）

時子は鞆の中から赤ペンを取り出し、手の甲に「笑う美形」と書き付ける。そして矢印を引っ張って、「ルシード・ヴィティクス」

と書いた。「白髪で、性格の良さそうな人」は「キド」。あとは聞き取りにかなり不安が残るので「？」つきだ。「派手な杖」が「サウザンド?」。そして「鎧」が……。

「おい！」

仏頂面の男が声を上げる。

男は不躰にも時子を指さし、「何だそれは」と、低い声で尋ねた。指先を辿ると、今まさに時子が取っていたメモ、手の甲へと至る。

「何って、名前ですよ」

「名前だと？ 一体、誰のだ」

高圧的な態度にムツとするが、いちいち怒ってはられない、と時子は自分に言い聞かせた。今のところ、ルシードとキド以外には好意的な態度を取られていない。大多数からは邪魔者扱いを受けているのだ。

「こつちに来てから会った人の名前です。キドさんとか、ルシード……様の。忘れるといけないから」

「忘れっ!?! こ、この無礼者オオオオ!!!!」

「うわっ」

男の顔色が熱湯を被ったように赤くなる。戦慄いた唇から放たれた怒声は時子がこれまで聞いた怒鳴り声の中で最もうるさいもので、思わず、耳を塞いで距離を取ってしまう。

しかしこの距離を、男は足を踏みならして詰めてくる。

「殿下の御名を忘れるだ!!」

殿下つて、と一瞬の驚愕。それは時子の些か心許ない知識によれば、主に王族へ使われる敬称である。

驚愕を一瞬で打ち切ったのはエイスレイドの放つ威圧感だ。

時子に詰め寄る男の身長が、馬鹿みたいに高い。体躯に均整が取れていたため、こんなに背が高いなんて思わなかった。

頭上よりも高いところから落ちてくる怒鳴り声に、時子の体は否応なく竦んでしまう。

そっちの都合なんて知らねーよ！ と心の中では怒りの声があがっているが、如何せん、男の勢いの方が強かった。

「エイスレイド殿」

男との間にキドが割って入る。

相変わらずの穏やかな声だったけれども、それには不思議な強制力があつた。

チツと舌打ちして、エイスレイドは時子と距離を取る。

「トキコ様は異世界から来たお方。エイスレイド殿にとっては当然のこと、トキコ様にとってはそうでない。トキコ様のありようを尊重して下さい。ルシード様もそれをお望みでしょう」

「殿下の御為、一番良いのはそれを排除することだと思うがな」

「それ」呼ばわりは時子の怒りに大量の油を注いだ。

グワツと炎が燃え盛る。けれど、自身に重々言い聞かせたこともあつて、時子の怒りは顔に出るだけに留まった。行き当たりばったりの感情を優先しがちの時子にとってはよく我慢した方だ。

でも、時子の性格はエイスレイドに関係ない。

エイスレイドは、さらに時子の感情を煽ってきた。

「俺は騙されんぞ、魔女め」

キドの肩越しに、エイスレイドは鋭い視線を時子に向けてくる。害意のありありと浮かぶ視線だった。

初対面、一対一でこの視線を向けられたら、時子はプライドをポイと捨てて逃げていただろう。

「お前が本心を隠していることなど、あの場にいた人間は皆、気付いている」

しかし今、時子とエイスレイドの間にはキドが入っていて、彼は明らかに時子を優先している。キドは『殿下』に時子のことを頼まれているのだ。

かの殿下は、今のところ、多分、時子の味方。

暴言を吐きまくっているエイスレイドが手を出してこないのもそのおかげ。

時子の中で「やっちゃんえ、やっちゃんえ」という声がした。

「取り繕った化けの皮、直ぐにも剥がれ……」  
「ていうか」

女子高生らしい一言で、時子は男の言葉を遮った。

この台詞が、イントネーションによっては最高に腹立たしいことは勿論承知している。

「取り繕って当たり前じゃん、私、ここの人間じゃないんだから。ここがどこで誰が誰でどれだけ偉いか、何も知らない。全然知らない人に対していきなり本心を語れって？ 出来るか馬鹿！ ていうか、やるか馬鹿！」  
「バツ」



エイスレイドの表情が引きつる。

ざまーみろだ！ と時子は勝ち誇った。

エイスレイドを虚仮にしたことで後々不都合があるかもしれないが、そんなのは後で考えれば良いことだ、と感情的になった時子は考える。いつものパターンだった。

心が晴れると頭の方も回転がよくなり、いけ好かない男の名前が鎧の男の名前と同じであることに気が付く。多分、同一人物だろう。勢いに乗った時子は手の甲のメモへさつと書き足す。

「エイスレイドは鎧で黒髪、マジむかつく」

「貴様、言わせておけば！」

「こっちの台詞だっつーの」

些か子供っぽいと思ったが、効果の方を優先し、時子はエイスレイドに向けてベー！ と舌を出して見せた。勿論、キドの背中に半身を隠してだ。

「魔女めが……魔女めが……！」

怒りに震えるエイスレイド。

……キドの体も僅かに揺れる。しかしこちらは、エイスレイドの揺れ方とは全く種類が異なっていた。

「ふふふ。ルシード様にお見せしたい光景ですな」

「キド殿！」

怒鳴るエイスレイドをサラリと無視して、キドは背後の時子に優しく話しかけてきた。



……と言つても通じるわけがない。

騒ぎ立てるエイスレイドに「そうかもね呪いかもね」と適当に返事をして、時子は携帯の電源を切った。

国の名前はヴィテイクス。当代国王の名前はウィルロイド。国王には8人の子供がいて、ルシード・ヴィテイクスは第4子。けれども、母親の身分と彼の性別から、王位継承権は第1位。

「つまり、王太子」

「然様でございます」

「分かったか、魔女め。貴様が気安く接して良いお方ではないのだ。分かったか？ 分かったか！？」

「他にも知りたいことがあるんですが」

「どうぞ、なんなりとお尋ね下さい」

「話を聞かんか！」

喧嘩腰のエイスレイドをあしらい、時に無視しながら聞いた話によると、異世界から人がやってくるという事態には多くの前例があるのだという。

その内、ルシードが関わったものは214を数える。

多い。

時子の表情が強張ったのに気付かないのか……そうでないのか……穏やかな表情のまま、キドは更に語る。

曰く、ルシードが関わった召喚は過去に214回、その中で時子のような例、無意識に行われた召喚は109回。

「ルシード様は大変強大な魔力をお持ちです。この魔力は行使されずとも、そこにあるだけで周囲へ影響を及ぼします。特に、空間を歪めたり世界の壁を薄くすることが多いようでございます。こうした場所は異世界と繋がりやすく、ふとしたきっかけ　ルシード様に限ったことでございますが　で、異世界の生き物を呼び寄せてしまいます。前例を鑑みますと、深夜から早朝にかけての時間帯で喚ばれることが多いようでございます」

「……寝惚けて喚ぶ訳じゃないですよね……？」

「ご安心下さい、トキコ様。過去にルシード様が寝惚けことはありません」

是とも否ともつかない答えを返し、キドは話を続けた。

質問を意図的に打ち切った気がしたのは時子の気のせいだろうか。そうであつて欲しい。

「トキコ様の前に喚ばれたのは黒い4枚羽根を持った女性で、王国は4日、朝が来ませんでした。3ヶ月前のことでございます。その前に喚ばれたのは稚い姿の老女で」

「稚い老女つて、矛盾してませんか」

「人の生気を吸って命を存えているのだと聞きました」

「……」

「その前は、下半身が蛇の女性です。ルシード様が退屈なさっているせいか、近年喚ばれるのは、半ば伝説の生き物ばかりでございます」

エイスレイドへ視線を向ける。恐らく、時子の視線は大分柔らかく、同情を含んだものになっているだろう。

生暖かい視線にエイスレイドはたじろいた。

「な、なんだ」

「私は人間ですよ、普通の」

「俺は騙されんと言っている！」

「エイスレイド殿は、嘘の上手い二枚舌の魔女に弄ばれたことがございます」

「キツ……！？ ゲフ、ゴホッ、ゴ……ッ」

過去の失態を暴露され、エイスレイドは噎せに噎せる。

時子は手の甲へエイスレイドについての新たな情報を付け加え、ついでにキドについても「割とひどい」と書き足した。

目覚めた時子を囲んだ者達の装備がやたら重々しかったことに納得する。

彼等は臨戦態勢にあったのだ。

「その時もルシード様は楽しげにしていらっしゃいましたが、トキコ様には及びません。ルシード様にお仕えて20年、あそこまで楽しそうなルシード様のお姿は初めてでございます。トキコ様には是非、1日でも長く滞在して頂きたい」

「悪い冗談だ、キド殿。一刻も早く退散させることこそ殿下の御為。無害に見えても魔女は魔女、どんな毒を持っているか」

復活したエイスレイドがまくしたてる。

魔女扱いには腹が立つが、提案には全面的に同意する。時子とて、帰れるものなら一刻も早く帰りたいのだ。

話を聞いていると不安が募る。

臣下が慌てふためく様を面白がったり、退屈だからと伝説の生き物を喚んじやったり、ルシード・ヴィティクスは明らかに、性格に難のある男だ。「帰す」という口約束はきちんと守られるのだろうか……？

「今まで召喚された人達は、ちゃんと自分の世界へ戻れたんですか」  
キドが頷き、時子の不安が少し軽くなる。

「どれくらいで？」

「滞在する期間はその時々で異なりました。最長はこの国への永住を希望なさった方で24年、最短は1日でございます」

1日！

無断外泊1回分。家に戻った時に死ぬほど怒られるだろうが、生活にあまり影響はない。時子は表情をパツと明るくした。

けれど、それを見たキドの表情は曇る。

「トキコ様の場合は、恐らく、1週間ほどかかるかと思います」

「えっ！？ どうしてですか」

「月が満ちるまで1週間かかるのです。満月の光は魔法使いの力を安定させます。ルシード様は万が一の失敗を避けるため、満月の夜を選んで、召喚された方々を元の世界へ送り返していらっしやいました」

「失敗って、例えばどういう……」

「違う世界に渡ってしまったり、体に欠損が出たりすると聞いております。ああ、ご安心を。ルシード様以外の魔法使いに聞いた話でございます。ルシード様が失敗したことはこれまで一度もございません」

……満月まで待たずに、と我が儘を言える話ではなさそうだ。

1週間。たかが1週間、されど1週間。1週間行方が知れなかつたら、両親は警察へ搜索願を出すだろう。戻った後も、生活に大きな影響が出る。

「……」

どうにかならないかと煩悶する時子の頭に、一つの、かなりメジャーな物語が思い浮かぶ。異世界に迷い込む少女の話だ。

この少女は何ヶ月かを異世界で過ごしたが、現実に戻って来た時、時間の経過は殆どなかった。

「私がこちらに連れてこられた、次の瞬間へ返してもらったことって出来ますか」

「どう……でございましょう。私には分かりかねる話でございます。ルシード様にお尋ねすれば直ぐに分かるでしょうが」

ガラリ、とエイスレイドの目が光る。

「殿下は執務についておられる時間だ。キド殿、よもやこの魔女のために殿下の……」

「お会いになられますか、トキコ様。ルシード様は歓迎して下さいますよ」

胸にあるのは今すぐにハッキリさせてしまいたいという気持ち。それと、問題なんて後回しにしちゃえよ、という気持ち。

どちらかと言えば後者が強い。

窓の外へ目を向けると、青々とした葉をいっぱいに抱え込んだ枝が、風を受けて気持ちよさげに揺れている。

日本では紅葉が始まりつつあった。

この国と日本では季節に違いがあるよう。けれどもアラームが鳴ったタイミングを考えると、時間の流れにはあまり差異がない。

ルシードが執務についているこの時間帯、学生ならば学業に勤しんでいる時間だ。

戻る時間を選べないなら、どう足掻いても本日のテストは絶望的。



「トキコ様？」

だったら、わざわざ聞きに行かなくても良い。

……時子の通う学校において、試験を何らかの理由で欠席した場合、再試を受けて得られる得点は最高でも80点。

（順位を20番上げるなんて絶対に無理だよ）

夢のまた夢。前回の成績を維持できるかも怪しい。

それに加え、こちらでの時間経過がそのまま反映されてしまった場合は、もれなく家族総出でのお説教を聞かされることになる。

「急ぐ話ではないので、今は良いです。会いには行きません」

やめ、やめ、と時子は頭を振って嫌な想像を振り払った。

「それよりもお茶のお代わりを貰えますか」

嫌なことは後回しにして、時子はお腹を膨らませることを選んだ。

駅前の大通りを50メートルほど歩き、スーパー手前の交差点を右へ。それから、2つめの信号を左へ曲がると、時子行きつけの店がある。

風除室に入ると販売促進用のCMが聞こえてきて、時子は人に見せられない類の笑顔を顔に浮かべた。

以前は「カミングスーン」で終わっていたCMが、今日は「ナウオンセール」で締めくくられている。

待ちに待った発売日だ。

しかし時子は新作コーナーへ行かず、レジへ直行する。取り置きをお願いしていたのだ。

馴染みの店員へ挨拶して、「例の物ありますか」と問う。「勿論だよ」という応えに、時子はウキウキと財布を取り出した。

……が。財布が軽い。異様に軽い。

中身を確認すると、誕生日に買って貰った財布の中身は空っぽで、紙幣1枚、硬貨1枚入っていない。

「なんで!?!」

目を剥く時子に店員が言う。

「なんでって、時子ちゃん、順位下がったじゃない」

うえっと変な声を上げて店員を見ると、そこにいたのは時子の母。

「お、おか、おか、おかあさん!？」

イリユージョン……のわけがない。

時子は異変に気付き、記憶を高速で逆回しにする。そして再生。めくるめく血色の記憶に「ああ」と声が漏れ、

「……」

時子はパツチリと目を開けた。

目に入るのは百花繚乱を彫り込んだ天蓋。辺りを見回すまでもなく、自分の部屋じゃないことが確認出来た。

「今度はどこ」

まさか2度目の世界移動ではないよな、と笑えない心配をしながら体を起こすと、「お前の部屋だ」という返事があった。

声のした方を見ると、一度見たら忘れられない……忘れたくないと思わせる、常識外の美形が書類を読んでいた。

ルシード・ヴィテイクス。

ヴィテイクスの王太子で、魔法の鬼才。性格に難ありの美形。手の甲に書いたメモを見るまでもなく、彼の情報がパツパツと頭に浮かんだ。

(とりあえず、世界は移動していない)

寝起きで動きの遅い頭でもって一つ整理し、時子はベッドから下りた。

寝起き、ベッド。そうだ、と時子は思い出した。

お茶菓子でお腹をいっぱいにしたあと、どうにも眠くなり、時子は休ませて欲しいとキドに願い出た。

テスト勉強のために睡眠を削っていたこと、びっくり仰天の事態に見舞われたことで時子の疲労はピークに達していたのだ。

(でも、貸して貰った客間はもつと小さかったような)

いや待て、ルシードは先程、「お前の部屋だ」と言わなかったか？

「ここ、私の部屋なんですか」

「内装が気に入らねば言え。すぐに直させよう」

部屋をぐるりと見回し、広さと内装に「ない」と時子は思った。

この広さはない。壁紙もない。窓もない。家具もない。時子の感性には、どれもこれも受け付けない。

ベッドの支柱一つとってもおかしい。丸棒だって用は足るのに、上から下まで、絡みつく蔦の意匠が彫り込まれている。色は照りのあるバースト シェンナ。申し訳ないが、時子には「高そうだ」と言うことくらいしか分からない。

部屋にあるもの全てが、「よく分からないが高そう」だった。言い換えると、「よく分からない時子でも、高価なことは分かる」。

時子の感性には受け付けない部屋だが、「変える」なんて、尚更受け付けがたい提案だ。一体いくらかかるのか。

「いえ、お気遣いなく」

高級なもので埋め尽くされた部屋にあって、一際目をひく、特に高級な男に言う。

ルシードは手にしていた書類をテーブルに放り、ゆっくりと顔を時子へ向けた。

たったそれだけの所作に、時子の視線は吸い寄せられて戻ってこない。

「遠慮は要らぬ」

「してません。してませんから」

瞬きを繰り返すことでどうにか視線を外し、時子は首を振った。

「そうか」と答えるルシードの声が楽しそうで、時子の体温がじんわりと上がる。

よもや、見惚れたことに気付かれてはいまいか……。

（気付いてそう）

漫画だゲームだ、と現実離れしていることが当然の美しさに慣れ親しんでいた時子は、生身の男性に見惚れた記憶がなかった。

見惚れる、そしてそれを見透かされるというのは……無闇矢鱈に恥ずかしいことだと今知った。

頭を掻きむしりたい衝動を緩和させるために、時子は別の話題をルシードに振った。

「殿下はどうしてここに？ その書類、お仕事なんじゃないですか」  
「どうして、とは」

ルシードが首を傾げ、流し目を時子に送る。

「お前のもとに私が来る理由は限られていよう」

あらゆる面で思わせぶりの台詞だ。

単純に考えれば、時子が願った内容のどれか。意図的に滴り落とされている色気を考えると、男女という差異を念頭に置いた一種のお誘いだ。

答えは簡単。後者を匂わせて時子をおちよくりつつ、前者。

本当に良い性格をしている、と時子は思った。

勿論、顔には出さない。家に無事帰るため、ルシードの機嫌を損ねるわけにはいかなかった。

「帰るための準備が整ったんですか」

全く何も感じていない、と自分に3回言い聞かせて尋ねる。

ルシードは口元に手を遣り、小さく笑った。

「別の理由だ。お前を送り返すのは1週間後になる」

キドに聞いたとおりの答えが返る。

「お前が言ったのだろう、トキコ。話し相手が一人欲しいと」

「はあ？」

喧嘩を売っているみたいな声が出て、時子は慌てて口を押さえた。機嫌を損ねてはいけないと言い聞かせ続けているのに、私という人間は！ と我が事ながら顔が引き攣る。

「言っただろう？」

「ええ、はい、確かに言いました。こっちの世界のことを私は何も知りませんから、相談役の人が欲しくて。てつきり、キドさんがそ

うなんだと」

こんな大物の話し相手は要らない。

「殿下はお仕事があつて忙しいですね」

「さして重要な仕事ではない」

「私、凄く我が儘なので、付き合わせるのが申し訳ないです」

「一度くらいは人の我が儘を聞いてみたいと思つていたところだ」

確かに、王太子であるルシードに我が儘を言える人間はいないだろう。

と言うか、この男は明らかに、我が儘を聞かせる方の人間だ。

今將に、時子がそうされようとしている。

「……よろしくお願いします」

時子の諦めは早かった。

ルシードは長椅子にゆつたりと腰掛け、時子の反応を楽しみながら会話をしている。彼の機嫌を伺う人間であれば、引き下がるほかなかった。

くそう、覚えてろよ、と心の中で喧嘩を売り、時子はベッドから下りた。

向かったのはルシードの正面。話し相手だと言うならば、相手になつて貰おうではないか。聞いておきたい話もある。その後は嫌がらせじみた細かい質問をチクチクと……機嫌を損ねない程度に。

「殿下、聞いても良いですか」

「勿論だとも」

「殿下が私を家に送り返してくれるのは1週間後なんですよ。その時に、時間を選ぶことは出来ますか。出来たら、世界を跨いだ直後の時間に戻りたいんです」

「可能だ」

ルシードの答えはあっさりしている。

……あっさりし過ぎていて、俄には時子の中に染み入らない。

「試したことはないが、召喚直後から10年後くらいまでは時間を選べるだろう」

「直後でお願いします。10年後とか断固拒否です」

「念を押さずとも、お前の望む時間に送ってやる。それで？ 他に聞きたいことはあるか」

「ええと」

嫌がらせじみた、細かい質問をチクチクとしてやる予定だった。

（こっちに喚ばれた直後の時間に戻る。ていうことは、つまり、生活には何の影響もないわけで、テストもちゃんと受けられるわけで）

駅前の大通りを50メートルほど歩き、スーパー手前の交差点を右へ。それから、2つめの信号を左へ曲がったところには、時子行きつけの店がある。店内には販売促進用のCMが流れていて、時子は御機嫌。何故なら、待ちに待ったゲームを手に取ることが出来るから。



ついさつき見た夢が、めまぐるしく、脳内で再上演される。

レジへ向かう時子。けれど財布は空っぽだ。「なんで」と叫ぶ時子に答えたのは、イリユージョンよろしく店員と入れ替わった母。彼女の声が、ことさら大きく頭に響く。

「なんでって、時子ちゃん、順位下がったじゃない」

(……下げるか……！)

時子の希望する時間に戻れるとルシードは言った。

新作ゲームと自分の間を隔てていた、分厚すぎる壁が消え去り、時子は猛然と奮い立った。

ルシードに細かい質問をチクチクしている暇はない。

勉強だ、時子はテスト勉強をしなければならない。

犠牲となる筈だった得意科目に費やせる時間が、今や1週間もある。やろうと思えば満点だって！

「他に聞きたいことは、今のところないです。安心しました。ありがとうございます、殿下」

時子はこの世界に来て初めて笑った。

1週間後の新作ゲームを思い、浮き立つ気持ちのまま、満面の笑みをルシードに向ける。

突然の笑顔に、ルシードは少し驚いたようだった。

見開かれた目は珍獣を見るようであったが、上機嫌の時子は気に

ならない。

今なら、エイスレイドの暴言だって笑って許せる気がした。

時子は浮かれていたのだ。

どのくらいかと言うと、危険だと分かっている男に手招きされて、  
のこのこ近付いてしまふくらい。

のこのこと近付いた時子は手を取られ、引き寄せられた。

足を踏ん張る余裕も、体勢を整える余裕もなく、時子は引き寄せられるままルシードの腕の中に収まった。

カメか、ヤドカリであれば良かったと思う。身を守る盾を望むのが贅沢だと言うならば、びっくりしても反射的に顔を上げたりしない、判断力が欲しい。

性格に難のある男に引き寄せられて収まった腕の中、顔を上げたら何が起こる？

口の端に柔らかなものが触れ、時子は目を見開いた。

一体何が触れたのかは流石に分かる。何故なら、見開かれた目がルシードの顔を映していたからだ。

「ちょ」

柔らかなものは、ルシードの唇だった。

驚愕という感情が腕に力を込めさせる。

頭であれこれと考える前に、体が勝手に、ルシードを押し退けようとした。

（いやいやいや！）

顔を上げてしまった時とは違い、時子はすんでのところで自制に成功した。

他のどんな人間に強気な態度を取れても、この男は駄目だ。

ルシードの機嫌を損ねると、時子は家に帰ることが出来なくなってしまう。

目の前の男が、本気で、時子なんぞに手を出すとは思えないが、何を考えているか分からない以上、下手な真似は出来ない。……つまり、大人しくしているしか。

時子は体を縮こませ、ギョ、と目を瞑った。

柔らかな感触は、口の端から頬へ移る。

それからこめかみを掠め、額へ。

背中がむず痒くなるような感触に、時子はひたすら耐えた。

（く、くすぐりたい！ きもちわるい！）

拷問と言ったらい過ぎだが、愉快と不快では明らかに後者である時間に終わりを告げたのは、「つまらぬ」という傲慢な声だった。同時に時子を捕まえていた腕が緩む。

床に落ちても構わない！ という勢いで、時子はルシードの腕から逃げた。

そしてギリギリ安全地帯と思われる場所まで逃げて、ルシードの機嫌を伺った。

ルシードは、怒ってはいなかった。

しかし彼自身が言ったように、つまらぬような表情をしている。

甘んじて彼の戯れを受け入れるという選択は、どうやら間違っていたようだ。

（じゃあ、どうすれば良かったと）

時子に思いつく選択肢は2つ。積極的に応えるか、ふざけんなど突っぱねてやるか。

臣下の困る様子を見て楽しんでいた男だから、きっと、突っぱねるのが正解だろう。

……しかしテストとは違い、正解が分かったところで、次回への肥やしにはならない。

「朝のように食ってかかってみせろ、トキコ。エイスレイドにはそうしたと聞いた」

エイスレイドを虚仮にしたことで後々不都合があるかもしれないが、そんなのは後で考えれば良いことだ　なあんて考えていた数時間前の自分を殴りに行きたい。

「朝は、寝惚けてたから出来たんです。そうじゃなかったら、ノートが滅茶苦茶に汚されても殿下に食ってかかったりしません」

例えルシードが望んでいても、朝と同じ暴拳には出られない。  
何故ならば。

（言って良いのかな、これ。言わない方が良いような気もする。……けど、出来ないことを期待されて無理を吹っ掛けられ続けるより、正直に言っておいた方が）

ルシードは時子に、不遜な態度をお望みだ。

ハイハイと彼の希望に答えられる強心臓の持ち合わせはないが、自分の都合と天秤にかけ、1回くらい良いかと軽く考える大雑把さが時子にはあった。

「エイスレイドにしたようなことを殿下にして、殿下が怒ったら困りますもん。家に帰れなくなっちゃう」

「約束を違えることはせぬ」

時子が本音を話してもルシードは怒らなかった。

「だけど、と時子は思う。流石に言えない。」「それって口約束ではないんですよね」とは。

俺強いから殴っても良いよ！ と鼻高々のガキ大将がいたとして、1発目をぶち込んだとして、良いよと言った手前、1発で怒り出すことはまずないだろうが、10発殴った後は分らない。物事には、限度というものがあるのだ。

誤魔化すように時子は笑う。

しかしルシードは時子の内心を見透かしたように、

「では、こうしよう」

と、切り出した。

「お前が心底嫌がることの出来ぬよう、私自身に魔法をかけよう」

ルシードはどこからともなくナイフを取り出すと、自身の指先に滑らせた。

ナイフが滑ったあとには赤い線が引かれ、端から雫が滴り落ちる。ルシードはナイフをしまい、血に塗れた指で腕に模様を描き出した。

時子が口を挟むのを待たず、ルシードは自身に魔法をかけ始めたのだ。

「ちょおお！ まっ、待って下さい、殿下」

「今止めると魔法が暴走するかもしれぬが、良いか」

「良いわけないです、止めないで下さ……。ああ、でも、でも、どう、どうしよう！？」 何でそこまでするんですかつ」

今し方逃げてきた距離を戻り、時子はルシードの回りをウロウロした。

時子のために自分へ魔法をかけるとか、やめて欲しい。エイスレイドを始め、時子に目くじらを立てていた者達にこんなことがばれたら、どれだけ反感を買うことか！

「私が面倒を見ると決めたのだ、あれらは決して手を出さぬ。不安なら、あれらにも同じ魔法をかけるか」

「不安ですけど断ります。あいう、殿下、それ、魔法をかけた後すぐに解いて貰うわけには」

「それではかけた意味がなかつた」

「かけることなかつたんですよ、魔法！」

何でそこまでするんですか、ともう一度、聞いた。

ルシードは腕に模様を描きながら、

「私は楽しいことが好きなのだ」

と答えた。

「楽しければ楽しいほど良い。しかし私が楽しいと感じるものはほんの僅か。私は怠け者ではない。手を尽くして望みが叶うならば、刻苦を厭いはせぬ」

「私でなくても良いと思うんですけど。殿下は偉いんだから、楽しませろと言えば楽しませてくれる人がいくらでも……」

「私が楽しいと感じるものはほんの僅か、と言ったが？ 一声発するだけで手に入るような享樂は既に飽いたのだ、トキコ」

我慢という言葉を知らないのか、と時子は思った。

次の瞬間には「私が言えたことじゃないけれども」と我が身を振

り返ることになり、口の端が引きつる。

自分と重ね合わせて考えれば、知っていても、実行するつもりがないのだということは直ぐに分かった。

どうして自分が喚ばれたのか、と、時子は何度か考えた。時子と同じ境遇に陥った者であれば、誰でも考えるだろう。

時子は心当たりが全くなかったのだけれども、ここへ来て、「まさか」という思いが胸に湧いた。

類は友を呼ぶ、と言う。ルシードと同じように我慢の出来ない人間である時子だから、引かれてしまったのでは、なかるつか……。

（まさかね！）

時子は頭を振ってこの考えを振り払った。

そうこうする内に、ルシードが「終わった」と時子に告げる。

見れば、腕に描かれた模様が淡く輝いていた。輝きは徐々に強くなる。しかしある時を境に光は弱まり、輝きが失せるとともに模様も消えてしまった。

「これでもう、私は、お前が心底嫌がることは出来ぬ」

「魔法を使われたことが心底嫌です。解いて下さい、今すぐに」

ルシードは小さく首を傾げ、口の端を持ち上げた。

「何も起きぬ。トキコ、お前、『心底』嫌ではないのだろう」

「いやいやいや」

時子は勢いよく首を振った。

こんな魔法を使われてしまったことがエイスレイド達に知られたら、時子は針の筵に座らされることになる。心底嫌に決まって……。



（いや、でもな）

ルシードが使った魔法が本物なら、約束が反故にされることはない。

そう考え、ほっとする気持ちが時子の中にはあった。

「本当に魔法、使いました？」

「使ったとも」

にこりと笑い、ルシードは部屋の中を見回した。

そしてベッドの端に目を止めると、長椅子から立ち上がり、時子が止める間もなく歩いていく。

またか、と時子は思った。ルシードは時子に許可を取らない。彼の立場であれば咎められることはないのだが、心の準備をさせないことで、時子の薄っぺらい猫を剥ぐという目的が見え隠れしているようで、時子は嬉しくない。

果たして、ルシードのしたことは時子の度肝を抜いた。

彼はベッドの端にあった皮の鞆　時子の持ち物が詰め込まれたものだ　を手に取り、窓へと向かった。

窓の外は紺色。ここで漸く時子は、日が暮れていたことに気が付いた。

窓から見えるのは細い枝だけで、時子は自身に宛がわれた部屋が高所にあることを知る。

高いところにある部屋、その窓を開け、ルシードは鞆を　。

「ばっ」

投げようとした。

しかし、投げることはなかった。

時子が声を上げた瞬間に、ルシードがその場に頽れたのだ。

「で、殿下!？」

近寄ってルシードを窺うと、腹が立つほど肌理の細かい肌に汗が噴き出ている。それだけではない、肌は青ざめ、呼吸が異常に荒かった。一瞬前までは、普通であつた男が、だ。

「信じられない」

刻苦を厭わないと言つた男は、時子に魔法を信じさせるため、時子が心底嫌がることを、わざとやって見せたのだ。

「信じられねば、もう一度試すか？ お前が嫌がりそんなことはざつと31通り思い付くが」

青ざめた顔を上げ、微笑む。

容態と表情のアンバランスさが、妙な迫力を放ち、時子を圧迫した。

自身の命運を握る男をざつくばらんに扱うなんて、嫌だと時子は思う。

相手がそれを望んでも、時子が安心出来ないから、嫌だ。

でも、ルシードの場合、ざつくばらんに扱わなければ、もっと安心出来ないことになってしまいそう。

そう考えたら、天秤が傾きを変えるのは直ぐだった。



「一週間をどう過ごすかはもう決めたか？ 王都を見て回りたいなら護衛を用意するが、どうする？」

「遠慮します」

「私が案内してやっても良いぞ」

「断固拒否します。一週間をどう使うかはもう決めたので、お気遣いなく。部屋で大人しくしています」

時子にはテスト勉強という、大いなる目的があった。

異世界を見て回りたいという気持ちもあるにはあったが、ウロウロしておかしのことに巻き込まれないかという不安の方が圧倒的に強い。

「存外、真面目だな、トキコ」

「心外です。私は今時珍しいくらい真面目だって、近所で評判でした」

そう、ルシード・ヴィティクス王太子殿下に嘘八百を並べ、引き籠もることを宣言したのは昨晚のこと。

有言実行のつもりだった、時子は。

過去形。

のっぴきならない事情により、今現在、時子はルシードの執務室へ向かっている。

\*\*\*

昨晚、捨てていた世界史で高得点を狙うべく、時子は夜遅くまで勉強した。

そして見事に寝坊した。

王太子の客である時子が惰眠を貪るのを止められる者は、誰もいなかったのだ。

携帯のアラームも鳴らなかった。エイスレイドに「呪いか！」と騒がれたときに電源を切り、そのままにしていたのだ。

さらに時子の受難は続く。

遅めの朝食を取って時子は勉強を始めた。快適な温度に保たれた部屋はしんと静まり返り、勉強にはもってこいの環境だった。

立ち並ぶメイドさえいなければ。

1、2、3……12人。壁に沿って並ぶ、1ダースのメイドが放つ威圧感たるや！

加えて、彼女達が時子に向ける視線は、決して好意的とは言えなかった。エイスレイドが向けてきた害意ほど酷くはないが、向けられて心地良い類のものではない。空気を読むのに長けた女子高生として察するに、怯え、忌避……畏怖とか呼ばれるものであろう。

何でだ。

メイド達は時子を怖がっていた。  
しかしそれを押し殺して、部屋の隅に控えている。視線以外に彼

女達の感情を伝えるものはなかった。彼女達は無表情で直立し、微動だにしない。時子にしたら軽いホラーだ。

全く集中の出来ない状態で、それでも「部屋で大人しくしている」とルシードに言った手前、時子は耐えた。耐えながら教科書をめくる。パラリ、パラリとページのめくれる音が、1ダースと1人の人間がいるとは思えない静かすぎる部屋に響く。

集中できていないから、読めども読めども内容が全く頭に入らない。かわりに、ページをめくればめくるほど、部屋に満ちる緊張感が増していく。

はつきり言つて、勉強の邪魔だった。

何が目的か分からないが、部屋から退散して欲しい。

時子は自分がそれを彼女達に望める立場であるような気がしたが、口にすることは出来なかった。無表情を浮かべたメイド達の顔色がいつの間にか紙のように白くなっていて、時子のアクションによっては死者が出そうな雰囲気になっている。

この、今にも氷河期を迎えそうな緊張感を解いたのは、控えめなノックの音だった。

客人の訪れ。告げられた名前に、時子は一も二もなく飛びついた。

「トキコ様、御機嫌は……」

キドが挨拶を終える前に、時子は彼に願った。

「殿下に会いたいんですけど、可能ですか」

ルシードに「部屋で大人しく」と宣言してから1日も経っていないが、気不味さは窓の外に放り投げる。

今はメイド地獄から逃げ出すことが先決だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7291s/>

---

テストには出ないけど覚えよう。異世界ってね、危ないよ！

2011年5月28日11時24分発行